

# ペスタロッチャー・フレーベル研究の現状と課題

## ペスタロッチャー研究者の立場から

広島大学 鈴木 由美子

日本ペスタロッチャー・フレーベル学会の25年を振り返るにあたり、まずペスタロッチャー研究への貢献という点について、著作・論文数を参考にして数的な側面から検討することにする。そのためにペスタロッチャー研究の動向を、まず数的に把握する。データベースを用いて、ペスタロッチャーで検索してヒットするものを年次ごとに整理して25年間の推移を表した。それから本学会紀要『人間教育の探究』に掲載されたペスタロッチャー関係の論文の数の年次推移を出した。それからスイスのペスタロッチャー研究に関わるデータベースを用いて、スイスでの数的な年次推移と比較して日本のペスタロッチャー研究が数的にどのような特徴を持つかということを最初に示そうと思う。その後、1996年のペスタロッチャー生誕250年を機としての現在の動きを、スイスのペスタロッチャー研究の動きから日本のペスタロッチャー研究を見るという限定された範囲内ではあるが、説明していくことにする。

## ペスタロッチャー研究の量的傾向

### (1) ペスタロッチャー関連著作・論文数

1982年から2006年までのペスタロッチャー関連の論文を、CiNiiとNDL-OPAC（国立国会図書館のOPAC）を用いて「ペスタロッチャー」と「pesta lozzi」をキーワードとして検索した。論文の総数は347本であった。第5、第9、第15回大会のところが多くなっている。第5回大会は1986年で、この年は本学会紀要の『人間教育の探究』が創刊された年である。その時期に少し数値が増えている。それから一番多い第15回大会は、1996年、ペスタロッチャー生誕250年の年である。2004年9月12日の本学会第22回大会でのシンポジウム「1920年代・1930年代日本におけるペスタロッチャー—どのようにペスタロッ

「チーは論じられたかー」において、寺岡聖豪会員が、ペスタロッチー没後100年記念行事が開催された昭和2年に、全国的にペスタロッチー研究関係の論文・著作数が増えたと報告されたように、こうした記念の年に増えているのが特徴だといえる。

## (2) 『人間教育の探究』掲載論文数

第5回大会から紀要の発行が始まったが、当時は毎年発行されていたわけではなく、6,7回大会の際には紀要は発行されていない。その後もところどころペスタロッチー関連の論文が掲載されていない年もあるが、大体コンスタントに1~4本ぐらいのペスタロッチー関係論文が公表されてきている。

## (3) スイスでのペスタロッチー関連著作・論文数

Pestalozzi-online のデータベースで検索したスイスでのペスタロッチー関連著作・論文数は、全部で465本だった。1996年に論文数が相当集中しているということがわかる。1996年には100本近い論文が発表されている。それ以外の年にも10本~20本ほどの論文が発行されている。

日本と比較してみると、日本ではコンスタントではあるが発行数は少ない。イベントの年においてもスイスほど多くの著作・論文は発行されていない。それに対し、スイスでは毎年の発行数は少ないけれども記念式典にはかなり多くの著作・論文が発行されている。これらから、日本ではペスタロッチー研究が専門化されていて、ペスタロッチーを研究している専門家が、専門学会であるペスタロッチー・フレール学会に入り、ペスタロッチー研究をしているという傾向が見て取れる。それに対し、スイスの場合は、日ごろはそれぞれが専門的な研究をしていますが、記念式典といったイベントになるとペスタロッチー研究として発表できる素地があると考えられる。その意味では、ペスタロッチーについての知識は、ひとつの教養として捉えられていて、他の専門分野を研究している研究者でもペスタロッチー研究の論文を書ける、そういう素地がある、あるいは底力があるという印象を受ける。

この点で、ペスタロッチー・フレール学会は、ペスタロッチー研究の専門

化に貢献したといえるが、その一方で、教養として広くペスタロッチーの理論を普及させる点ではあまり貢献できていないのではないかと考えられる。一方で専門的な研究を進めるとともに、少なくとも教職をめざす人々や教育学を学ぶ人々の基礎教養としての必要性をアピールすることが求められるのではないだろうか。

## ペスタロッチー研究の内容的傾向

次に、ペスタロッチー研究の内容面での傾向について検討する。1996年にスイス・チューリヒでペスタロッチー生誕250年祭が執り行われた。そのときのテーマは、「ペスタロッチーは神話か、現実か」ということで、偶像化されてきたペスタロッチーをもう一回読み解いていこうということであった。これに関して大きく二つの流れがあった。

一つはチューリヒ大学のエルカース教授やオスターヴァルダー教授に代表される批判的検討の立場である。彼らの立場は、ペスタロッチー自身の業績が何であるかということと、ペスタロッチーがどのように影響したかということは分けて考えないといけない、という立場である。彼らは、これまでのペスタロッチー研究は、ペスタロッチーが現実的に何を言ったかを吟味することなく、世界に影響を与えたということ偉大だと考えて正当化してきたのではないかと批判している。彼らはこれを偶像化と呼んでいる。ペスタロッチーを偶像化してきたのではないかと反省に立って、業績が何であったかということと影響は何であったかということ、分けて考えようという立場である。

もう一つは、チューリヒ大学の歴史学者であるシュタートラー教授に代表される立場である。彼は、ペスタロッチーの理論と実践を吟味して現在に何を残し、何を捨て去るか、ということを考えなくてはならないと指摘している。つまり彼は、ペスタロッチーの業績は今日的な価値があるという点で評価できるという立場に立っている。それゆえ彼は、ペスタロッチーは神話である、偶像化されてもはや使えないのだという評価は、ペスタロッチーを見誤るのではないかと述べている。彼は時代を読み解いた上で、ペスタロッチーを今日的に評価していく必要があると述べている。つまり、厳密な資料考証に基づいて正し

く評価することにより、今日的な評価は可能であるとする立場に立っている。

本学会会員によるペスタロッター研究では、オスターヴァルダーの立場に立った研究としては、福田敦志会員の研究があげられる。シュタートラーの立場に立った研究としては、鳥光美緒子会員の研究があげられる。このように本学会においても、1996年のペスタロッター生誕祭の流れに位置する研究が行われているといえる。この観点から、学会のペスタロッター研究の動向を見てみると、3つの流れがあると考えられる。

第1に、明治以降作られてきたペスタロッター像を再検討していこうというものである。本学会で課題研究として行っているペスタロッターの受容史や影響史の研究もその一つである。ペスタロッターが何を言ったのかということと、影響が何であったのかということとを分けて考えていこうという立場である。ペスタロッターが言ったからそれが正しいと偶像化するのではなくて、時代の中で批判的に読みとくことが必要だという立場であり、課題研究の成果が期待される場所である。

第2に、資料考証によってペスタロッターを再検討していこうという立場である。ただ実際にはスイス人ではない私たちが資料考証をするのは非常に困難なことである。長田新先生が大変なご努力によって、『ペスタロッター全集』（平凡社）やモルフの『ペスタロッター伝』（岩波書店）を翻訳されたことは、大変大きな功績であり深く感謝しなければならない。ペスタロッターの著作や研究書を日本語で読める、このことがどれだけペスタロッター研究の水準をおしあげることに貢献したかと思うと、そういう地道な研究が大変重要であるといえる。まだ翻訳されていない著作集や書簡集の翻訳を進めることも、資料考証という点から見れば重要な課題であろう。そのひとつとして、荘司雅子初代会長、長尾十三二初代副会長のご尽力により玉川大学出版部より刊行された『ペスタロッター・フレーベル事典』（1996年）ならびに岡田正章前会長のご尽力による『増補改訂版 ペスタロッター・フレーベル事典』（2006年）は、ペスタロッターの資料考証という点で大きな貢献であるといえよう。

第3に、ペスタロッター研究から、現代の教育問題に対する本質的観点を導こうとする立場である。2007年9月10日に開催された本学会第24回大会でのシ

ンポジウム「ペスタロッチー・フレーベルと現代—古典研究の今日的意味を問う—」での福田弘会員、渡邊満会員のご提案がこれにあたりと考えられる。ペスタロッチー研究をペスタロッチーの研究で終わらせるのではなく、現代の教育にどのように貢献するのかという観点を持って研究するという立場である。ペスタロッチーが時代の何を批判したのか、どのように解決しようとしたのか、それはなぜなのか。こういった視点を持つことで、今の時代を批判的に読み解き、問題を解決するための本質的な観点を導きうるのではないだろうか。

これら以外では、ペスタロッチーに関するデータベースの作成、学会紀要の電子ジャーナル化または欧文翻訳版の刊行等によって、国内外においてペスタロッチー研究の公開を促進することがあげられる。また、公開講演会や公開シンポジウムを開催して、ペスタロッチーの教育思想を広く一般に公開していくような活動が必要ではないかと考える。

本日の発表で、十分にペスタロッチー研究の動向を把握し紹介できているとはどういえないが、これをひとつの機会として、今後のペスタロッチー研究が発展していくことを期待して、提案を終わらせていただきたい。

### 【参考資料】

文献検索に用いたのは以下のデータベースである。CiNii, NDL-OPAC, IDS Zurich UZH04.

Osterwalder, Zum 250. Geburtstag Pestalozzis -rationale Argumentation oder Kult des Pädagogischen (Zeitschrift für Pädagogik, März/April 1996)

Oelkers, Osterwalder(Hrsg.), Pestalozzi-Umfeld und Rezeption, Weinheim und Basel, 1995.

Stadler, Pestalozzi, Zürich, 1988.

福田敦志「ペスタロッチー教育方法思想における実践構造—オスターヴァルダーによる『頭・心・手』再評価の批判的検討を中心に—」(『人間教育の探究』第11号, 1998年)

「1920年代・1930年代日本におけるペスタロッチー—どのようにペスタロッチーは論じられたか—」(シンポジウム抄録)(『人間教育の探究』第17号,

ペスタロッチー・フレーベル研究の現状と課題

2004年)

鳥光美緒子他「『学習する存在』に関する教育思想史的研究ーペスタロッチー研究の動向を踏まえてー」(H17年度広島大学大学院教育学研究科リサーチ・オフィス研究プロジェクト報告書)

「ペスタロッチー・フレーベルと現代ー古典研究の今日的意味を問うー」(シンポジウム抄録)(『人間教育の探究』第19号, 2007年)

### **【謝 辞】**

論文検索にあたって、広島大学大学院教育学研究科学習科学専攻の蘆田智絵さんと福地孝倫さんに献身的にご協力いただいた。深く感謝申し上げたい。